

原理から見た宗教統一

— 仏教と宗教統一 —



ホニキョウ
サンジ
イナリ
世界宣教師
(36家庭)

は、霊界がまだ許してくれていないのか」と感じたので

「あの『信行』を消して、『知行』に直してきました」と夫に言うと、「いや、消さないほうがいいよ」と言うのです。食事に行つてだれもいない時、黒板に書いてあった主人の名前を書き直しました。それを知った主人からは、「余計なことは、しないほうがいいよ」と言われたのです。でも、その後、再び夫の名は総督の名に戻ってしまったのですが、修練会の最後になって、やっと主人の名前が『知行』と正しく書かれるようになりました。その時は、霊界から許された感じがしました。

主人からは、「ここでは、聞きたくない話や嫌なことも避けなくて、あえて、そのようなことを聞きに来たという心情で過ごしてほしい」と言われました。

聖霊の役事をされる大母様

悪霊が自分の体から抜けたとき、どのように感ずるのか大母様にお尋ねすると、「一時は、虚脱感を感じる」と言われました。私は、大手術を受けたあとのように感じまし

た。

大母様は金孝南執事を通して、手で私たちの体を叩いて悪霊を出してくださるのですが、笑みを浮かべながらやってくださいます。

その微笑み(ほほえみ)が、ほんとうに慈悲深く、聖霊のように感じるのである。私は韓国で、何度も大母様にお会いしているのでよく分かるのですが、金孝南執事の目は大母様の目と同じでした。聖霊は慰労と感動の働きをされると言われますが、全くその通りです。

金執事の笑顔に出会うと、肉体はとても疲れているように見えても、これほど美しい笑顔が他にあるだろうか、と思うほどの微笑みをされています。

今も続いて、清平で修練会が行われています。四十日までは二十一日修練生は、世界の救いの為に世界各地に行き、一般食口は清平の三泊四日修に参加することを通して、民族的メシヤとして出発することが願われています。

大母様は、霊界と地上界を結ぶ使命をもって霊界に派遣されました。清平での大母様の役事が、宇宙的カナン復帰を成就する大いなる恵みと恩寵の摂理であることを知り、心から感謝するものです。

一 序論

宗教の出現が、メシヤの再臨と関係があるという点においては儒教も同じだった。六数期間の法則に従い、人間(アダム)創造の六日前から宇宙創造が開始されていた。その原則に従い、仏教にもメシヤであられるイエスの降臨六数期間前の六世紀前(五六六年)に、創始者釈迦(釈尊)が誕生した。

本論文ではまず、仏教出現当時の社会環境と釈迦の教えの要点を紹介し、それから原理との関係を論ずることにする。

二 本論

(一) 仏教の成立と主張

(1) 仏教の成立

まず仏教の成立に関して調べてみることにする。

① 仏教を説いた釈迦は紀元前六世紀(五六六年)に、当時

のインドの釈迦族である淨飯王とその王妃マヤ夫人の息子として生まれ、出生後七日目に母親を失い、母親の妹の手によって養育されたことが知られている。

②王子は成長につれて国王になるための教育を受けた。その間、人間がみな経験しなければならぬ生老病死の人生苦の問題を苦悶するようになり、後に富貴と栄華をすべて捨てて、周囲の引き止めにもかかわらず入山修道し、ついに大悟覚醒、すなわち解脱に至ったのである。

③解脱とは、涅槃の境地に到達することをいうが、これは無明、渴愛等の煩惱を完全になくした平安と安心の境地であると同時に、知慧と慈悲に到達した境地であり、輪廻転生の車輪からの解放を意味する。

(2) 初期仏教の教え

仏教の初期の教えは四諦に関するものであった。四諦とは苦諦、集諦、滅諦、道諦などの四段階の教えのことで、その要点は次のようである。

- f、正精進…正しい労力を繰り返す。
- g、正念…常に正しい道を念願しながら理想を志向する。
- h、正定…精神統一を通して、迷妄から離れた境地に至ることで、禪定に相当する。

(一) 原理から見た仏教

上のような仏教の要点を統一原理と比べてみると、仏教の教えも統一原理の一部であることが分かる。まず、上記の四諦、すなわち、苦諦、集諦、滅諦、道諦について調べよう。

(1) 苦諦…苦諦は、人間が生きている中にはさまざまに「苦」（苦痛の生活）を経験するようになるという教えで、原理（統一原理）の総序に出てくる次のような内容に相当するといえる。

すなわち、「死の暗闇を押しつけて、命の光を探し求めながら、つらく、険しい人の道を彷徨する人生」「人間はだれしも不義の欲望を満たすたびにごとくに、良心の呵責を受け、苦悶するようになる」などの内容である。

①苦諦とは、生老病死の人生の四苦と愛別離苦（出会って愛し別れる苦しみ）、怨憎会苦（恨む者と会わなければならない苦しみ）、求不得苦（いくら求めても得られない苦しみ）、五蘊盛苦（心身から盛んに発生する苦しみ）まで合わせた八苦のことである。

②集諦とは、以上の苦痛の原因は渴愛（過分な愛欲）にあるという教えである。

③滅諦とは、渴愛が取り除かれ苦痛が消滅された平安の境地、涅槃の境地のことである。

④道諦とは、渴愛を克服して理想の境地である涅槃に至る道に対する教えである。道諦に次のような八つの修行方法があるが、これを八正道という。すなわち、

- a、正見…人生と世界を正しく見ること。
- b、正思…正しい思い、正しい意思。
- c、正語…真実を正しく語ること。
- d、正業…正しく善なる行いをする。
- e、正命…生活を正しくする。

(2) 集諦…集諦、すなわち苦痛の原因になる渴愛に関する教えは、原理の総序の「わたしの肢体には別の律法があつて、わたしの心の法則に対して戦い……」「悪の欲望を達成させようとする邪心の指向性」などにある「別の律法」「悪の欲望」に相当するといえる。

(3) 滅諦…滅諦は渴愛が取り除かれ、平安な境地に至るようになることをいうのであり、原理と比べると蕩滅復帰を成した境地であるといえる。

渴愛と蕩滅復帰…ここで渴愛と蕩滅復帰との関係について述べる。一言で言えば、渴愛は原理的な愛から外れた非原理的な愛に当たる。渴愛は慈愛に対する反対概念で、慈愛の境地が平和、安心の境地、すなわち原理的な境地であるのに対して、安心から離れた状態である渴愛は、非原理的な境地の自己中心的な愛である。

(4) 道諦

①道諦は修道に関する教えのことで、ここでの修道は「理想の境地、平和と安心の境地に到達するのに必要な修行方

法」のことで、すでに述べたように、正見、正思、正語等の八つの修行方法である八正道は、原理から見ると、人間の創造本然の生活相、すなわち墮落しない人間の原理的生活様式に当たる。

②墮落のない本然の世界では、日常生活それ自身が神中心の原理的生活であり、正道の生活になるので、あえて八正道とか道諦とかという用語は要らなくなる。

③ここで指摘したいのは、道諦とか八正道とは、本来の境地、創造本然の世界を想定また前提としない限り成立しえない用語である。あたかも、健康というものが生まれながらにしてあるということを前提にしなければ、病気の治療という言葉が成立できないし、本来の完璧な状態を前提にしないで、未熟とか成熟という用語を使うことができないのと同様である。

創造本然の世界を前提とするということは、神の創造を前提とするということになり、したがって神の実存を前提にするということになる。すなわち、神による創造が前提にならないと、道諦とか八正道の概念が成立する根拠がないと同様である。

③つまり、第一に、仏教の修道の理論は原理の第一祝福（個性完成）の理論に当たり、第二に、修道の目標である涅槃に関する理論は、原理の第三祝福すなわち「愛による主管性完成」の理論に当たる。

④このように、修道に関する初期仏教の教えは、原理の第一祝福と第三祝福に関する教えに比べられるが、第二祝福である家庭完成に関しては、仏教では長らく触れられなかった。これは、家庭が修道において重要な場所であること、を、仏教が見過ごしていたからであると言わざるを得ない。過去長い間、修道僧たちがたいい家庭を離れて、入山修行する傾向があったという事実がそれを立証する。

⑤それでは長い間、仏教が修道僧たちに家庭を離れるように、それとなく勧めてきた理由は何か？ これは世俗から離れなければ修道が不可能であるという仏教の教えが大前提になっていたからである。つまり、家庭内で、父母、夫婦、子女、兄弟姉妹との世俗的な因縁に縛られている限り、修道は難しいということである。

くなるのである。

(5) 仏教の修道の目標

①苦のない、渴愛のない理想世界としての涅槃の世界というとき、この理想世界は人間が修道によって自己を完成した後に到達する地点である。そこは不慣れな他郷ではなく、帰っていつて住むように、あらかじめ定められた自分の故郷である。

ところが、ある事情によって故郷の地を長い間離れた、すなわち故郷を失ったので、その失った故郷に帰っていく開拓の道が修道の道であったのである。しかるに仏教では、人間がなぜ自分の故郷を離れたのか、いつ離れたかという問題については遺憾なことに答えがない。

②ともかく仏教の修行の道は、人間の自己完成の道であると同時に還故郷の道であった。ここで人間の自己完成とは、原理的には三大祝福の中の個性完成に当たり、還故郷は三大祝福の中の主管性完成に当たる。

⑥しかし家庭を離れるということは、個人の救いのために、家庭の救いをあきらめることにはかならない。釈迦が生存していた当時としては、それは避けられぬ事情であったが、今日、それはあり得ないことであると言わざるを得ない。家庭を離れた個人の生活は、厳格に言って成立できないからである。

⑦家庭は理想社会ではもちろん、世俗の社会でも社会生活の一単位である。したがって、家庭を離れるということは社会を離れることを意味し、個人の救いが文字どおり個人の救いだけに終われば、社会改革とは何の関係もない個人主義的な独善であり、自己満足となるので、厳格な意味で人類の救いではない。

元来、救いとは、神のみ旨と恩賜のもとでのみ可能であり、神のみ旨と恩賜はたとえ個人に与えられる場合でも、その個人の利益のためではなく、その個人に社会と世界と人類に奉仕するように拡大誘導して、最終的には全人類を救済できるようにする人類救援の一つの方便であったのである。

(6) 救いの概念…ここで救いの概念を考えてみよう。

元来、救いは罪の世界に生きている罪人の救いを意味する。罪人が悔い改めて自己完成を成し、三大祝福（個人完成、子女繁殖、万物主管）を完成することによって救いが成されるということが原理的な救済観である。ところが宗教をはじめ、大体の宗教の救済観は原理の立場から見ると、三大祝福の中の第一祝福に相当する個人の救い（個人完成）にすぎないということが分かる。

したがって、救いという点から見ると、第一祝福だけでは人類の救いは不可能であり、第二、第三の祝福まで完成して初めて人類の救いが完成されるようになる。人間の墮落が三大祝福を失ったところに起因するからである。したがって、原理から見ると、仏教の教えだけでは完全な救いは成就できない。この点においては従来のほかの宗教も同様である。

(三) 出現の時期から見た仏教

① 仏教ばかりでなく、儒教、回教（イスラム教）など神によって立てられた宗教は、その出現の時期がみなメシヤの

予備教育の内容がすなわち聖賢たちの教えである。インドの場合、仏教がそのような教えの一つであった。

(四) 終末の宗教統一と仏教

① すでに触れたように、神は終末が近づいてつれて、いろいろな特色ある宗教を立てて人類の精神を指導され、最後にメシヤ降臨の時には、一つの中心宗教を立てて、それまでの多くの宗教を一つに統合する宗教統一運動を展開される。それで、終わりには、すべての宗教はこの宗教統一運動にみな吸収統一されるようになる。仏教もその例外ではない。

② しかし、だからといって統一された後、各宗教の特色がなくなるわけではない。各宗教の特性はそのまま生きながら、一つの巨大な体系的宗教の理論の中に含まれるようになる。その巨大な宗教の理論の中に含まれるように、その中にはキリスト教的要素はもちろん、仏教的要素、儒教的要素、回教的要素、天道教的要素などがすべて含まれるようになる。

③ 今日、新しい歴史の出発のために古い歴史が終わる歴

出現と関係がある。メシヤ降臨以前の宗教は、メシヤの降臨を準備するために立てられた宗教であるので、六数期間前に出現している。仏教、儒教、ゾロアスター教など、有名な宗教はみなメシヤ降臨の六世紀前に出現した。アダム（人間）創造の六日前に、神のみ言によって、宇宙創造が開始されたことが法則として残されたからである。この法則が「六数期間の法則」である（ただし、回教はメシヤ降臨の六世紀後に出現した）。「原理から見た儒教と宗教統一」でも述べたが、仏教も儒教と同じく六数期間前、すなわち、紀元前六世紀前に現れたのである。

② 仏教がインドに出現したのも、メシヤの降臨を迎えられるように、インドの人々に道の修練をさせるためであり、メシヤが持つてこられる真理を容易に理解し、メシヤを迫害しないで迎えるようにさせるためであった。

③ メシヤがある地域に来られるとき、まず預言者あるいは聖賢が現れ、その地域の住民の言語で、その住民の習慣に合う方式で、人々を啓蒙して、後にメシヤが来られて発表される真理が分かるように予備教育をするのである。この

史の終末時代であると同時に、すべての既存宗教は新たに変わらなければ存続できない宗教の大変革の時代である。

三 結論

以上を一言で要約すると、紀元前六世紀のインドに仏教が出現したのは、六世紀後のメシヤ降臨に備えてインドの人たちを悟らせておき、メシヤを迎えるのに差し障りないようにするための神の摂理だったのである。

ところが、メシヤであるイエスが十字架で亡くなられたために、再臨の時である今日まで、仏教を存続させたのである。仏教だけでなく、すべての宗教はメシヤを迎えるように人類の精神を啓蒙させるためのものなので、メシヤが降臨して人類を迎えられるようになると、宗教の存在理由がなくなる。

したがって、宗教は結局、地上で盛衰を繰り返しながら、ある期間が過ぎれば、徐々にその影が薄くなるのである。今日の宗教現象がこれを表している。なぜならば、メシヤの教えの中に、従来のすべての宗教の教えがみな含まれていることを人類が知るようになるからである。（つづく）